

実践報告

高校生は「進路指導」に何を求めるか

—— 学生へのアンケート調査を基に ——

木 村 美奈子

What Do High School Students Want from Career Guidance?

— Based on a survey of first-year university students —

Minako Kimura

I. はじめに

学校教育において、「キャリア教育」の充実が図られるようになってから20年以上経った。その歴史を簡単に振り返ると、1999年に公表された文部科学省の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、初めて「キャリア教育」という言葉が登場した。ここでは、これまで中学、高校で「進路指導」の名で行われてきた指導はそのままにして、さらに小学校段階まで遡って「キャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）」として教育課程に組み込み、計画的に実施することを提唱している。「キャリア教育」が登場した背景として、当時、バブル崩壊後に若者の間で広がったフリーター志向が社会問題化していたことが挙げられる。

その後も文部科学省はキャリア教育政策として検討を重ね、2004年には「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」がまとめられた。この報告では、「キャリア教育」を「キャリア」の概念に基づき「児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と捉え、端的には、「児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観を育てる教育」とした。また、「進路指導」と「キャリア教育」との違いも明確に述べられており、これまでの「進路指導」では、「進路決定の指導」に重点が置かれ、志望先の選択・決定等に係る「出口指導」や進学指導、就職指導に重点が置かれていることを批判的に捉えている。つまり「キャリア教育」はより長期的に見た「生き方」指導とも言える内容となっているのである。

さらに2011年には、中央教育審議会はそれまでのキャリア教育を総括し、今後目指すべきキャリア教育の在り方について、100ページに及ぶ答申をまとめている（「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」（答申）中央教育審議会）。ここでも「出口指導」

を超えた、幼児期から高等教育に至るまでのさまざまな教育活動を通して、一人一人の発達を意識し、自立した社会人・職業人を育てることを目標としている。

では、この答申を受けて、学校現場ではどのように取り組みがなされているのだろうか。リクルート進学総研は、全国の国・公・私立高校の進路指導主事を対象に、進路指導・キャリア教育の実態についてのアンケート調査を定期的に行なっている。2016年に行われた調査によると、進路指導を「非常に難しい」と感じている割合は全体の30%ほどだが、「やや難しいと感じている」を含めると、全体の90%を超え、多くの進路指導担当者が困難を感じていることが示された。また、その困難さの要因は、1位が「教員が進路指導を行うための時間の不足」(67%)、2位は「(生徒の)進路選択・決定能力の不足」(67%)、3位は「入試の多様化」(63%)であった(『2016年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査』株式会社リクルートマーケティングパートナーズ リクルート進学総研)。この調査では、回答者のフリーコメントも掲載されているが、それを見ると書類作りや教員不足によって、きめの細かい指導を行う時間的、心理的余裕のなさが感じられる。また、文部科学省が社会の変化に合わせて、次々と教育改革を推し進める中で、依然として教師が古い価値観に囚われている様子も見とれる。

一方、特定非営利活動法人 NEWVERY は2017年に高校における進路指導の実態を調査・検証した白書『進路指導白書2017』を公表した。この調査報告での「進路指導の施策と実施時期」によると、「就職後を見据えたライフプランの検討」を実施していないと答えた比率が40.8%にのぼり、文部科学省が目指すキャリア教育の理念が浸透していないことが示唆された。また、「進路指導の目的」を問う質問では、「本人の興味関心や特性に合った進路とのマッチング」(57%)、「主体的に自分の進路を考え、計画する姿勢への転換」(55%)を重視した指導が行われており、生徒の個性を尊重し、主体性を育む姿勢が見てとれるが、一方で、進路指導の成果がどのような要素で評価されていると感じているかを問う質問では、「国公立大学への合格実績が増えた」、「入試難易度の高い大学への合格実績が増えた」を挙げる回答が上位となった。本来なら、主体性を育む指導をしているなら、主体性が育まれたか否かを評価せねばならないが、それは容易ではないため、結局、合格実績というわかりやすく、簡単に数値化できる指標に頼らざるを得ないということであろう。このことは、進路指導の評価の難しさを物語っている。2013年に国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターがまとめた「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告」でも、進路指導における評価の難しさを感じる教員が3割に上ることを報告している。

さて、このような状況を踏まえ、本稿では、中学・高校での個別の進路指導が実際にどのように行われているか、そこには「キャリア教育」の理念が反映されているか、また生徒自身はどのような進路指導を希望しているのかを調べるために、高校を卒業して間がない大学1年生(2年生も若干名含まれる)を対象としたアンケート調査を実施した。また、保護者から受けた進路についてのアドバイスも取り上げた。ただし、本調査は教職課程を履修している学生を

対象としていることから、高校ですでに明確な進路を想定している回答者が多い可能性があり、結果への影響を考慮する必要がある。また、中学での進路指導については、3年以上前の記憶に基づく回答となるため、信頼性に留意することも必須である。

II. 学生へのアンケート調査

対象者

愛知県内の私立大学の教職課程を履修している1年次の学生71人、2年次の学生4人の合計75人。全ての学生が「生徒・進路指導論」を履修している。

調査方法

Google フォームを利用したオンラインによる質問紙調査（無記名式）を実施した。対象学生は、自由な時間に個別に回答した。実施期間は2022年8月から9月。

調査内容と結果

0. 調査対象者の学部構成と人数

回答者の学部は表1のと通りの7学部であった。学部の人数構成は、偏りが大きいため、学部ごとの結果の提示は行わない。

表1. 調査対象者の学部構成

学部	経営学部	経済学部	情報工学部	人間学部	農学部	法学部	理工学部	総計
人数	1	8	3	12	12	8	31	75

1. 進路決定の際に最も意見を聞いた人物

初めに、回答者が進路決定の際に最も意見を聞いた人物を尋ねたところ、中学時代では「保護者」が最も多い41人（55%）であり、次に「教師」の18人（24%）であった（図1参照）。一方、高校時代では中学とは逆転して、「教師」が最も多い43人（57%）であり、次に「保護者」の21人（28%）であった。この逆転は、高校の進路決定が中学と異なり選択肢が多い上、入試形態が複雑であるため、入試知識の少ない保護者があまり口出しできないことが要因と考えられる。したがって、生徒は教師に頼るか、自分で調べるかしかないわけだが、では進路決定についての、自らの関与度はどれくらいだったと感じているのだろうか。

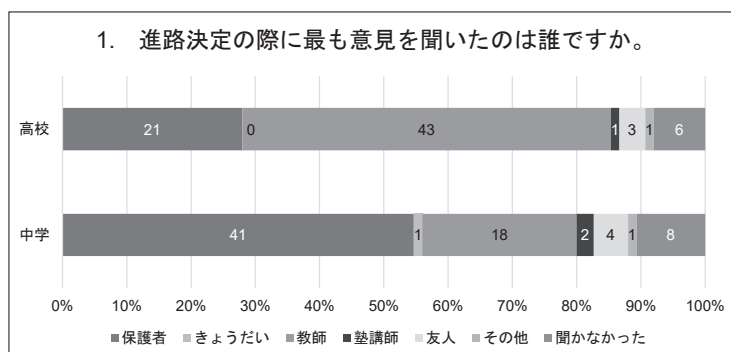


図1. 進路決定の際に最も意見を聞いた人物（グラフの棒上の数値は人数を示す）

2. 進路決定の自身の関与度

進路決定の際の自身の関与度を見てみると、中学では、「20%未満」の回答者が10人（13%）いたが、高校になって3人（4%）に減少している。また、関与度が「80～100%」の回答者も中学では30人（40%）いたが、高校では26人（35%）に減少し、一方、「40～60%未満」、「60～80%未満」が共に高校で増加している（図2参照）。このことは、高校卒業後の進路の多様性や選択の難しさからか、中学時代と比較して、回答者がより他者の意見に耳を傾けて進路を決定していることが見てとれる。

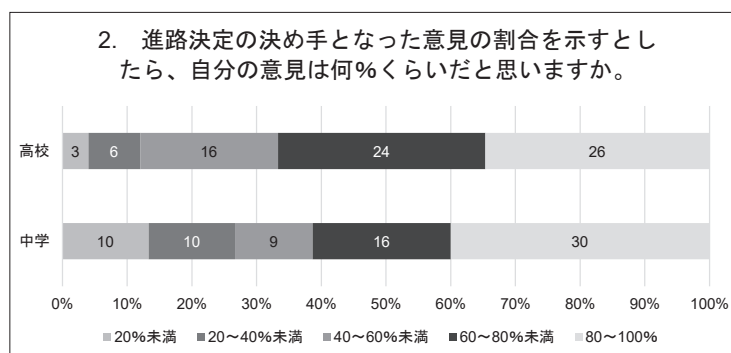


図2. 進路決定の自身の関与度（グラフの棒上の数値は人数を示す）

3. 進路決定に利用した情報源

では、回答者は進路を決める際にどのような情報源を最も多く利用していたのだろうか。中学で特徴的なのは、「教師に聞く」と「保護者に聞く」が同数でそれぞれ21人（28%）であり、他の情報源に比べて極めて多数であった。一方、高校で最も多いのは「教師に聞く」が32人（43%）であり、次に多いのは「インターネット」28人（37%）であった。「保護者に聞く」は2人のみで、専門的な知識を持つ教師が、生徒にとって信頼できる重要な情報源であることがわかる。現在

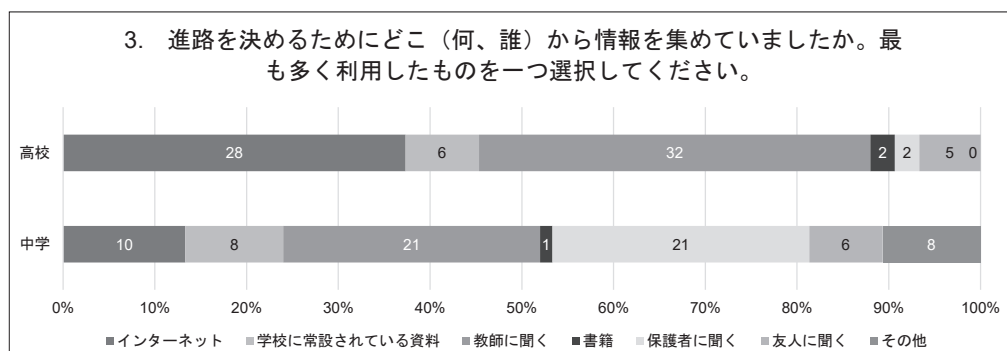


図 3. 進路決定に利用した情報源（グラフの棒上の数値は人数を示す）

の入試形態は非常に複雑で、親世代が受験した頃とは全く異なるので、保護者も子どもにとって有益な情報を提供することは困難だと考えられる。

4. 進路選択時の職業展望

この質問では、進路選択時に将来の職業を考えていたか否かを尋ねた。中学で「考えていなかった」と答えた回答者は 51 人（68%）で過半数を超えており、一方、高校では逆の「考えていた」と答えた回答者が 68 人（91%）に上った。本調査は教職課程の学生を対象としているので、教師になるという明確な目的を持って入学している者が多いことが、数値に影響していると考えられる。もちろん、教職課程を履修する学生は必ずしも教員志望ではないが、本調査はネット上で任意に行っているため、回答する学生は、総じて教育に関して関心のある教師志望の学生が多いと推測される。

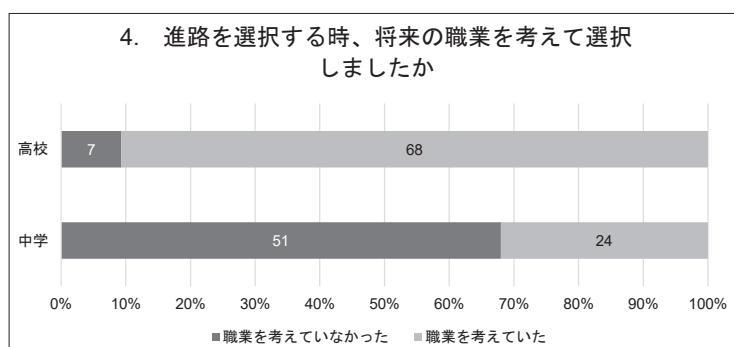


図 4. 進路選択時の職業展望（グラフの棒上の数値は人数を示す）

5. 進路指導時の教師からのアドバイス

質問3では、中学、高校共に、回答者は教師から最も多く情報を得ていたことがわかったが、では、実際にどのようなアドバイスを受けていたのだろうか。ここでは進路指導時の教師からのアドバイスの内容を尋ねた。この項目は自由記述のため、内容によって、9個のカテゴリに分類して集計した(図5)。それぞれの項目についての解答例を表2にまとめた。結果から、中学教師からのアドバイスは「なし」と答えた回答者が36人(48%)に上り、最も多かった。これは中学時代が3年以上前のことなので、記憶が薄れてしまっていることが理由のひとつとして考えられる。また、進路の選択肢が学力や地域によって比較的限られており、特別なアドバイスを必要としていなかったことも推測される。一方、高校では、「選択の際の留意点」が最も多く、16人(21%)であった。どのような視点から選択すればよいかをアドバイスする内容が多く見られた。アドバイスの内容について全体的に見ると、やはり高校教師からのアドバイスの方が、中学教師からのアドバイスより内容が具体的で豊かであった(表2参照)。これは記憶の問題もあるが、回答者がより熱心に教師からアドバイスを得ていた可能性もあると考えられる。なお、中学・高校の両者ともに、文部科学省が掲げる「生き方」指導に分類されるような回答はなかった。

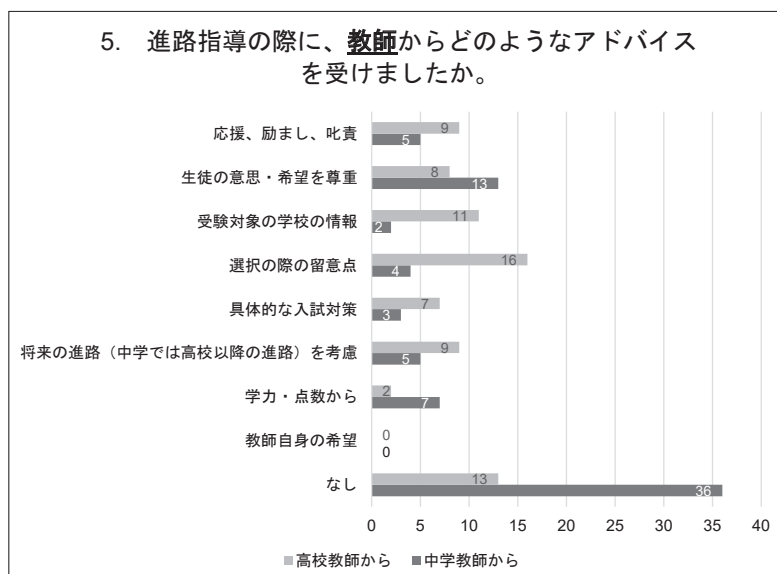


図5. 進路指導時の教師からのアドバイス(グラフの棒上の数値は人数を示す)

表 2. 教師からのアドバイスの回答例（各項目から 2 つ抜粋）

	高校	中学
応援、励まし、叱責	「精神面でのアドバイス」「国公立後期まで諦めずにやり抜くことが大切で、例え受からなかったとしてもこれからの財産になるとの助言を受けた」	「入試頑張れ」「頑張れと応援だけ」
生徒の意思・希望を尊重	「自分が行きたいところに行くのが 1 番だと言われた」「自分が何をしたいのかをよく考えること」	「自分のやりたいことができる場所に進めるといいとアドバイスをいただきました」「本当に行きたいとこに行け」
受験対象の学校の情報	「当時は自分には一択しかないと偏っていた考えを、道を沢山提示し開いてくれた」「受験科目の選び方や穴場の受験方式などの情報」	「同じ高校に行った先輩のエピソードを話してくれた。とても楽しそうだよと教えてくれた」「部活動のことを考えて決めたので、部活の雰囲気や成績などのアドバイスを受けた」
選択の際の留意点	「やりたい職業や好きな科目に近い、または受験内容から自分が受けやすいと思う大学を選ぶ」「挑戦する大学と自分の学力に合った大学と安全な大学を受験する」	「『どこ』で勉強するかより『何』を勉強するかが重要だ」「高校はまだ通過点であるという考えを持っておくということ」
具体的な入試対策	「面接や小論文など基本的な言動や表現のアドバイスをいただいた」「受験は情報戦だから過去問や面接について多くの情報を調べよう」	「たくさん問題を解いて、頭を慣らさせるようにしよう」「得意な数学で点を安定にとって他の教科の点数をあげると」
将来の進路を考慮	「自分のなりたい職業の資格が取れる大学を選びなさいと言われていた」「大学の偏差値や知名度は就職の際に大きく影響するから気にするべき」	「将来の職業の選択肢が増える高校に行くこと」「高校だけでなく、大学、将来どうしたいのか、どういう職業になりたいのか、人通り考えて、自分の志望校を決めるよういわれた。」
学力・点数から	「自分の模試成績から A か B 判定の出る国公立を算出し、志望校として勧めること。別の教師は各教科の点数のバランスを見て、志望校との差の埋め方を勉強方法の面で具体的にアドバイスしてくださった」「定期テストではいい成績を取り続けなさいと言われた」	「学力的に行けるところからオススメを受けた」「内申点からしてやめた方がいい」

6. 進路についての保護者からのアドバイス

次に、進路決定の際に、保護者からどのようなアドバイスを受けていたかを調べた。この項目も自由記述のため、内容によって、9 個のカテゴリに分類して集計した（図 6）。それぞれの項目についての解答例を表 3 にまとめた。中学・高校とも、保護者からアドバイスを受けていないと答えた回答者が 45% を超えた（中学 34 人・高校 36 人）。アドバイスがあった場合でも、その内容を見ると、具体的なものは少ない（表 3 参照）。2019 年に行われた高校生の保護者を対象にした意識調査（『第 9 回高校生と保護者の進路に関する意識調査』一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査）によると、進路選択について子どもにアドバイスすることは「難しい」と答えた保護者が 73% に上ることからも、保護者は回答者にとって記憶に残るほどのアドバイスをあまりしていないと考えられる。

アドバイス数が少ない中でも、「なし」の次に多かったのは、中学では「選択の際の留意点」が 12 人（16%）であった。内容を見ると、自分に合った校風や雰囲気を目を向けることや、施設の良さを考慮するよう促すアドバイスもあった。高校では「子どもの意志・希望を尊重」

が多く、13人（17%）であった。また、「保護者自身の希望」では、経済的な理由からか、国公立の学校の受験を希望する声も聞かれた。

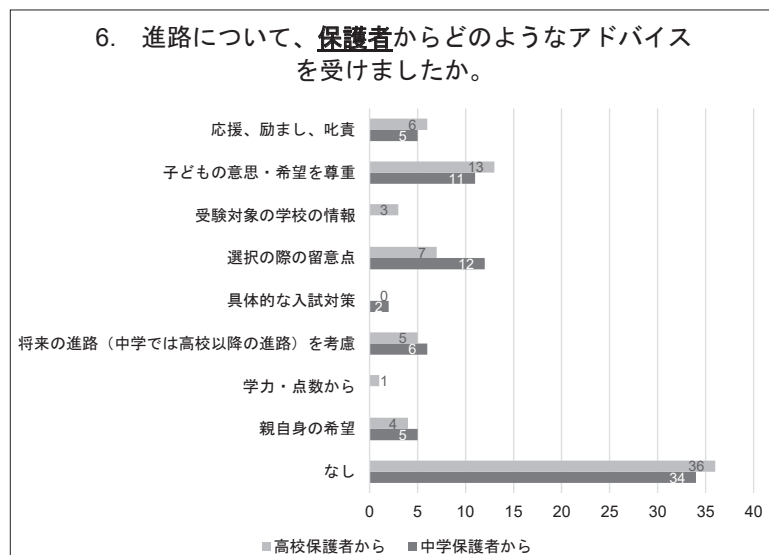


図 6. 進路についての保護者からのアドバイス（グラフの棒上の数値は人数を示す）

表 3. 保護者からのアドバイスの回答例（各項目から2つ抜粋）

	高校	中学
応援、励まし、叱責	「塾に入っていないからできない、スタートが遅かったからできない、〇〇だからできない、とできない理由を作るのをやめなさい」「自信を持って臨むこと」	「やる事やってから遊んでね」「死ぬ気で頑張れ」
生徒の意思・希望を尊重	「私の選択を尊重するので、決めた答えに対して応援するとの助言を受けた」「『自分のしたいことを選びなさい』と普段から言っており、自分の興味がある分野のことを行った時は背中を押してくれた	「人のせいにしてしまうのは良くないから、自分で決定しなさい」「リスクはあるかもしれないけど、最終的な判断をするのは自分」
受験対象の学校の情報	「自分の職場にいる人の話を聞いてきてくれて教えてくれたこと」「先生とも協力して様々な情報を仕入れていた。沢山の情報を与えてくれた」	
選択の際の留意点	「金銭的なことと後悔しない学校選びをとアドバイスを受けた」「不合格だったときのことを考えてできるだけ沢山の大学学部を調べなさい」	「進路や学習へのサポートが手厚い高校を選択する」「各学校の雰囲気（例：生徒自身が署名を集めたり、校内で運動を行うため自由な学校）」
具体的な入試対策		「受験勉強、面接の練習をしなさい」「苦手教科をもっと伸ばすように」
将来の進路を考慮	「大学4年間のことだけでなく将来のことを考えて選びなさい」「自分の夢を実現出来るところに進学しなさいと言われていた」	「自分が将来どうなりたいかを考えること」「将来を見越して進学校に行くべきだというアドバイスを受けた」
学力・点数から	「実力に見合ったところにいけ」	
保護者自身の希望	「学費を抑えろと言われた」「国公立大学に行くこと」	「高校名を言われた」「自転車で通える公立高校にしてほしいと言われた」

7. 進路指導の際に欲しかった、もしくは必要なアドバイス

ここでは、進路指導の際に教師からどのようなアドバイスが欲しかったか、もしくは必要だと思うかを尋ねた。この質問も自由記述であるため、9個のカテゴリに分類して集計した（図7参）。その際、高校では、一人の回答者の回答内容が二つの項目を含む場合もあったため、総数は78件となった。最も多かった回答は、中学では「学校や受験の情報」で、18件あった。内容としては、いろいろな選択肢を与えることを挙げている回答が目立っている。高校でもこの項目は多かったが（14件）、内容はより具体的で、入試の種類や問題傾向、学部学科の特徴などの情報提供の必要性を挙げていた。高校の「志望校選択の仕方と留意点」においても、同様の傾向が見られ、回答者個人の経験が背景にあると思われるような具体的な内容を挙げている回答が多く見受けられた。高校では「その他」が最も多かったが（15件）、その中には、「高校に受けた進路指導は私にとって一番いい物だった」や「十分だった」、「欲しかったものは全部先生たちがくれました」など、進路指導に満足している記述も見られた。

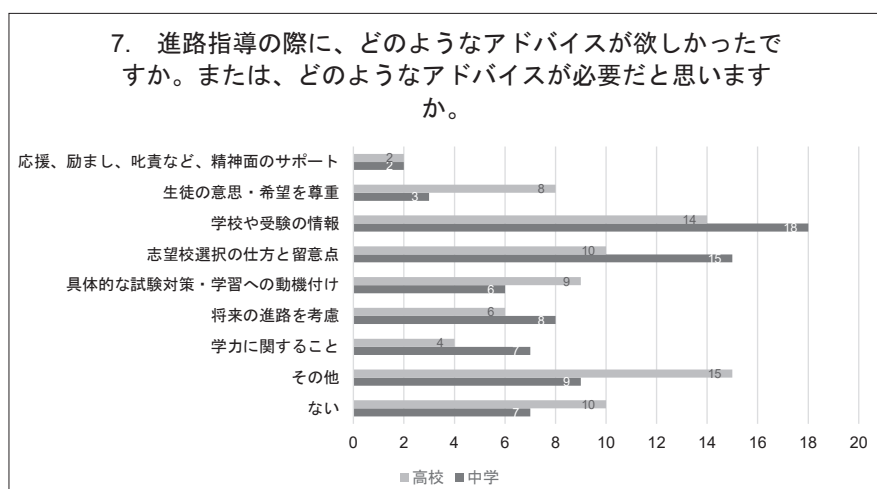


図7. 進路指導の際に欲しかった、もしくは必要なアドバイス（グラフの棒上の数値は件数を示す）

表4. 進路指導の際に欲しかった、もしくは必要なアドバイスの回答例（各項目から2つ抜粋）

	高校	中学
応援、励まし、叱責など、精神面のサポート	「大学受験こそ結果が全てな部分があるが、それだけではなく頑張りを認めるような助言や、これから繋がる経験をしているということを感じさせる助言があると良いと思う」「精神面でのアドバイス」	「メンタル面でのアドバイス」「勉強しろと言って欲しかった」
生徒の意思・希望を尊重	「自分はもう決めていたから、それが正しいと肯定してくれるとそれで良かった」「生徒の考えを尊重する」	「自身の自己実現を踏まえた個々の対応」「生徒の意思を尊重しつつ、リスクマネジメントをしてあげること」
学校や受験の情報	「学校選びに関してもっと力を入れてほしいかった。大学の掲げる理念など抽象的なものだけでなく、実際のカリキュラムを見て個々の学びたいことに沿う大学選びをアドバイスしてほしいかった」「性別や学力だけで大学や専門学校、学部などを限定せず様々な選択肢を与えたり情報提供することが必要」	「高校の偏差値や大学進学実績のみを判断したアドバイスではなく、その高校の個性（校則が厳しいが部活に力を入れている、や生徒主体の自治など）のアドバイス」「明確な進路実績や推薦の数。パンフレットやホームページでは分からない事も知りたかった。学校によって雰囲気や指導方針も異なるため、ただ偏差値で進学先を決定するのではなく、広い観点から自分に合った進学先を提案することが大切だと思う」
志望校選択の仕方と留意点	「自分に合っている大学を見つけるには、全国から徹底的に調べる。時には海外も視野に入れること。どうしても入りたい大学に落ちてしまっても浪人したい場合、自分が浪人生活を耐えられる人間なのか見極めること。それがわかるためにも生徒である今、必死に勉強すること。勉強は苦しいことではないということ。本当に辛い時お互いを助けてあげられるような人を大切にすること」「生徒の視野が広がるようなアドバイスや、こだわりやプライドが自分のやりたいことを邪魔してないか話すことが必要だと思います」	「ネットを駆使して高校を調べる適切な方法と、そのときの注意点を教えて欲しかった。口コミは信用しないで良いとも教えて欲しかった」「この高校を選択した場合、どのような道に進むことが出来るということや、どのような資格が取れるということをも自分たちに調べさせるなり、伝えるなりして欲しかった」
具体的な試験対策・学習への動機付け	「志望校ごとの問題の傾向やどのような問題演習を行えばいいのか」「危機感を持たせることが大切だと思う。ON/OFFの切り替えを徹底させるように指導する必要があると思う」	「苦手教科はどのように勉強すればいいのか」「勉強のスケジュールに関する指導」
将来の進路を考慮	「大学の選び方や大学での学びがその先の就職などの進路にどう影響していくかなどを経験談でもよいのでたくさん知りたかった」「進路に迷ってるとき、将来の夢に対して、どの学部学科に適切かどうか、そういったアドバイスを教えていただくことも必要だと思った」	「学歴じゃなく夢を実現できる学校に進学するように勧めるべきだと思う」「高校のことだけではなく、大学、専門、就職に繋げた進路の話」
学力に関すること	「今の学力と志望校の偏差値などの差を明確に教えてあげることが必要と思いました」「工業高校から大学に行く生徒全員に最低限大学の内容についていけるだけの数学、英語、物理を勉強しておくよう言う必要がある」	「偏差値と内申点はあくまでも数字であって、それだけを基準に考えてはいけなく、と言うアドバイスは必要だと思います」「受かりそうにない高校は『受からないだろう』と濁さず言って欲しかった」
その他	「先生の主観で決めつけるように否定せずに、否定するのなら他の選択肢をだしてほしいかった」「大学は就職を輔ける所ではなく、学問を身に付けに行く所だという助言が必要だと思う」	「勉強しろなど言わず、そっとしておくことが必要と感じる」「自分の学力にあっていればどこでもいいと思っていたので、自分で考える時間を与えて欲しかった」
保護者自身の希望	「学費を抑えろと言われた」「国公立大学に行くこと」	「高校名を言われた」「自転車を通える公立高校にしてほしいと言われた」

8. 大学選択において最も重要視したこと

最後に、高校時代の大学選択において最も重要視したことについて、9個の選択肢の中から二つまで選択させた。その結果、最も多かったのは「将来の職業選択につながるか」であり、

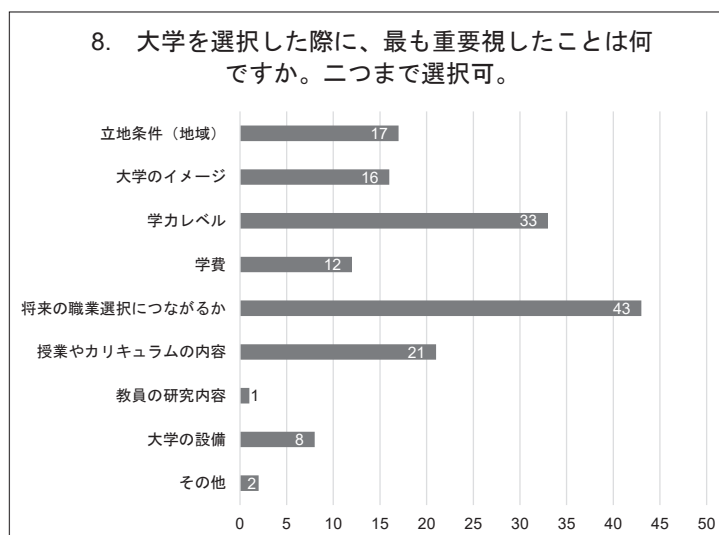


図 8. 大学選択において最も重要視したこと（グラフの棒上の数値は人数を示す）

43 人が選択した。質問 4「進路選択時の職業展望」でも述べたが、本調査は教職課程履修者を対象としており、数値を見る限り、やはり明確な将来展望を持つ回答者が多かったことが考えられる。次に多かったのは「学カレベル」で、33 人が選択した。3 番目ではあるが、「授業やカリキュラムの内容」を重要視する回答者も 21 人いた。全体の 3 割近くが、入学後の学びを視野に入れて大学を選択していることになる。

Ⅲ. おわりに

ここまで、文部科学省が充実を図る「キャリア教育」が、実際の教育現場にどの程度浸透し、指導に生かされているかを見るために、中学・高校の個別の進路指導の実際と、生徒自身が求める進路指導のあり方を調べるアンケート調査を行い、その結果を吟味してきた。進路指導の実際に関しては、生徒側の一方的な記憶によるものであるため、必ずしも正しく実態を描いていないかもしれない。そのことも踏まえながら、結果を振り返ると、中学では、生徒の意思や希望を尊重するとしても、将来を見据えた指導や文科省が唱える「生き方」指導—自立した社会人・職業人を育てる指導—と呼べる指導や、また、アドバイスはなかったと答える回答者が半数近くおり、生徒の心に残るような指導が、あまり行われていないことが見受けられた。一方、高校では、志望校を選択する際の留意点や、受験対象校の情報など、より決めの細かい指導が行われていたことが、回答内容から推測された。このことは、質問 1 の「進路決定の際に最も意見を聞いた人物」として、教師が挙げられていたことや、質問 7 の「進路指導の際に欲しかった、もしくは必要なアドバイス」でも、教師の指導に満足している旨の回答がいくつか見られ

たことから見て取れる。ただし、高校においても、将来の進路を考慮した指導や「生き方」指導はあまり行われておらず、直近の「出口指導」に偏っていることは否めなかった。しかし、この調査からは、実際に生徒が求めているものも、直近のより具体的な「出口指導」であることが窺い知れる。たとえば、質問7の「進路指導の際に欲しかった、もしくは必要なアドバイス」での回答を見ると、中学・高校の両方において、「学校や受験の情報」を挙げる回答者が相対的に多いことが、そのことを示唆している。一方、表4の回答例（質問7の回答）を見ると、分類こそははっきりと「生き方」指導とまでは言えないが、それに近い記述が「志望校選択の仕方と留意点」と「その他」に見受けられることも事実である。たとえば、「生徒の視野が広がるようなアドバイスや、こだわりやプライドが自分のやりたいことを邪魔してないか話すことが必要だと思います」や「大学は就職を輔ける所ではなく、学問を身に付けに行く所だ」という助言が必要だと思う」がそれに当たると考えられる。少数ではあるが、キャリア教育の理念が生徒の側に浸透しつつあることを示唆しているかもしれない。

引用文献

- 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ.「第9回高校生と保護者の進路に関する意識調査」(2019).
- 株式会社リクルートマーケティングパートナーズリクルート進学総研.「2016年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」(2016).
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター.「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告」(2013).
- 特定非営利活動法人NEWVERY.「進路指導白書2017」(2017).
- 文部科学省(中央教育審議会答申).「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(1999).
- 文部科学省.「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(2004).
- 文部科学省(中央教育審議会答申).「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」(2011).